
約束

綾瀬 純

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N8703E

【作者名】

綾瀬 純

【あらすじ】

高校1年の春。私は、とんでもないやつの奴隷になってしまった。ある日アイツのあとをつけたら、意識不明状態の樹のお母さんを見た。5年間お母さんを救うため、努力してきたが……

高校1年の春

私は、あなたとであつた。

私の名前は、山本愛里。

今日、この高校の門をくぐる。

「よし、素敵な恋愛をするぞー。」

「朝っぱらからうるさいなあ」

「わあっ」

びびったあ。

「邪魔なんだけど」

「あっゴメン。」

スタスタスタ……

なんなのアイツム力つく。

……まさか、さっきの聞いてなかったよね……。

私は、教室に入った。

席につこうとするとさっきの男が、となりにいた。

「うわあ、あんたさっきの男」

「なんだよ、人を化けもんみたいに」

「ム力つく。」

私は、おもわず本音を言ってしまった。

「へえー、ム力つくねえ。あんた、さっきさげんてたこと、ばらされたい？」

やっぱりさっきの聞いてたんだ。

「何のこと？」

私は、知らないふりをした。

「さあ、何のことでしょうねえ」

もう ム力つくム力つくム力つくム力つく。

「あんた、名前は？」

「……………俺に聞く前に、自分が名のれよ」

もうホントにム力つく。

「私は山本愛里。」

「あんたは？」

「俺は、樹。」

「ねえ、樹。お願い。さっきのことは、誰にも言わないで」

「じゃあ、俺の奴隷になれ。」

「はあ？なに言ってるの」

「ばらされたいの？」

「……………分かったわよ」

それから私は毎日、樹の奴隷になり、樹の言うことを聞いた。

「もう、何でもこんなことになったのよー。」

私は、素敵な恋愛をするはずだったのにい。

「おい」

うわ、樹だ。

「はいはい。今度は何でしょうか？」

「約束しろ……」

「はあ？」

「だから、俺とずっと一緒にいるって、約束しろ。」

「何よ急に……」

私は、普段さんざん私をいじめてきた樹が、普段と違う事に気づいた。

「……分かったわよ。」

私はその時、樹が、心の中で何か、とてもおもいことをかかえているような気がした。

私は、その言葉がきになって、放課後、樹のあとをおった。

「病院？」

樹がむかった先は、病院だった。

私は、初めて樹のお母さんをみた。
でも、樹のお母さんは、目を閉じたままだ。

「お母さん……」
樹がそう呟いた。

私は、その言葉を聞き、病院を出た。

「樹のお母さん美人だったなあ。とても樹のお母さんには思えない」
い

次の日

私は、樹に聞いた。
樹が言うには、一週間ほど前に倒れて、まだ、意識が、もどってないらしい。

でも、私には、樹が嘘を言っていることが分かった。

「愛里ちゃん？」

私は、ふりむいた。

「あのお、誰ですか？」

「あー、俺は中原友喜。友喜で良いよ。」
私は、ふしぜんに思った。

「あのお、なんで私の名前を知ってるんですか？」

「んー、樹から聞いた。」
もしかして、友喜さんって、樹の友達……。

「それより、愛里ちゃん、樹がどこにいるか知らない？」
「知らないですけど。」

何かあったのかなあ？

「あのお、友喜さん、何かあったんですか？」

私がそう聞くと、急に黙った。

「やっぱり何かあったんですね」
「教えてください。」

「……………実は今日、樹のお母さんが、死んだんだ。」
え……………。

「5年前、樹が、車にひかれそうになった時、樹のお母さんが、樹をかばって、車にはねられたんだ。」

「それから、樹のお母さんは、意識不明のままで、この5年間、樹は、樹のお母さんを、救うことに必死だった。でも、お母さんが死んだ今、あいつには、何も残ってない。」

「お願いだ、愛里ちゃん、樹と一緒に探してくれ」

「……分かりました。」

「じゃあ、何かあったら、俺のケータイにかけてくれ。」

「ハイ……」

私は、すぐに樹を探した。樹は、きっとひとりになるのが、怖かったんだ。

だから私に、あんなことを言ったんだ。

私は、探し続けた。
すると、かわらに樹がいた。

「見つけた。」

「樹、みんな心配して探してるよ……帰ろう……？」

「……」

「帰る」ってどこに帰るんだよ……？」

「もう俺には帰る場所なんかない……」

救いたかった人はもういない。ずっと、重かった。逃げ出したかった。

「母さんを死なせたくなかった。どんなに手を汚しても……けど……間に合わなかった。俺は何も救えなかった。」

「もう……何もない」

悲鳴が聞こえる

樹の背中から、

壊れてしまう

樹のこころ、壊れてしまう

「………してる」

「私が、あんたを愛してる。私じゃ、あんたのお母さんのかわりに

はなれないけど、あんたのお母さんに負けないくらい、あんたを愛すから……っ!」

「だから、

「何もない」なんて言わないで……。」

ごめん。あんたの苦しみに気づかなくて……ずっと独りしてごめん。

「もう、一人で進ませない。あんたが苦しむなら、私も、あんたと
いっしょに苦しむ!」

「もう、独りで背負わせない。二人でいっしょに、生きていくの」

その時、私たちは、甘くとろけるようなキスをした」

全部受けとめる。私のこころと体すべてをかくて私は樹を守る。

「えっ、樹見つかったの!愛里ちゃん、ありがとう。じゃあ、俺今
からそっちに行くから。」

長い夜が明けて、朝がきた。

「樹……」

「愛里ありがとう。」

次の日……

「樹、お葬式だよ」

「ああ」

「ねえ樹、樹のお母さんは、わかってたんだよ。樹が苦しんでいること。樹が、独りになるよりも、もうこれ以上苦しまないよう、樹の苦しみ全部背負って、天国にいったんじゃないかな？」

「……ああ、そうだな」

樹……声あげて泣いていいんだよ。

悲しいこと、もう我慢しないで……。

スウ……

「樹？ねっちゃった？」

きつと疲れてたんだね。

「愛里ちゃん！」

「あつ 友喜さん」

「この間は、樹をいっしょに探してくれてありがとう。」
「いえ、こちらこそ」

「あれ？ 樹寝てんの？」

「あつ はい」

「……そっかぁ……あつじゃあ俺そろそろ行くね。」

そして、お葬式が終わり、私と樹は、樹の家へいった。

「おい、なんだこれは？」

「なについてお掃除するの。」

……俺には、優しさでしか救えないものがある。 温もりでしか癒せないものがある。
それを教えてくれたのが、お前だ……。

「樹？ どうしたの？」

「まだ、お前に伝えてない言葉があった。」

「……………」

「愛してる」

もう

「愛してる」なんて言葉じゃ言いつくせない。

（後書き）

この小説をよんでいたいただきありがとうございます。

どうでしたか？たぶんまだ、だめだめでしょう。この小説は、私にとって、初の小説です。

なんだか、みなさんに、よんでほしくなりました。今回は、だめだったかもしれませんが、私はいつか絶対、凄い小説を書いてみせます。

そしたら、また、よんで下さいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8703e/>

約束

2010年10月10日12時00分発行